



館長あいさつ

館長 谷口 浩一

今年の桜はちょっと変でした。満開(?)の前にもう葉が出てる木もあったりして。暖か過ぎたからでしょうか。桜の開花には適度な寒暖の差が必要と言われますが、環境条件が整わないと清々しい満開の桜にもお目にかかれぬ。改めて、美しいものには諸条件の調和が必要なのだと思われました。

博物館、美術館の世界もこれと同様のことが言えそうです。常に、時や場所、素材をうまく調和させて、それぞれの施設のコンセプトや時々のテーマにフォーカスした展示が求められます。私共、黎明館では、常設展示に加え、時宜を捉えたテーマを設定し、18万点を超える収蔵資料や外部からの優品の中からそれに沿った素材を厳選して、鹿児島島の歴史・文化の一端を臨場感をもって体感していただけるよう日々努力しております。

この4月から施行された改正博物館法では、博物館は、社会教育施設と文化施設の両方の役割を併せ持ち、「誰もが利用でき」「多様性」「持続可能性」を有するものとされています。

当館は、城山の森を背景にリニューアルした庭園と3年前に復元した鹿児島城御楼門を前面に構え、「かごしま文化ゾーン」の一角にあって、日本有数の歴史・文化と触れ合うことができる施設です。今後、改正法も踏まえ、多様でいつでも誰でも楽しんでいただける施設として役割を果たしていきたいと思っております。特に子供たちには、郷土かごしまの歴史を楽しく学び、郷土愛を育ててもらいたいと願っております。

当館は、今年、開館40周年という節目を迎えました。明治百年を記念した事業の一環として昭和58年に開館した当館は、「夜明け」を意味する「黎明」の名を冠しています。不安定で先の見通せない今の時代において、来館される皆さんにとっての一筋の光になればと思っております。

今年は、夏には全国高等学校総合文化祭が、秋には「燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会」が開催される記念すべき年です。そして、3年を超える新型コロナ禍も徐々に明るい兆しが見えはじめ、コロナ前に近い日常を取り戻しつつあります。これから、県外、国外の方々も本県に多く訪れ、賑やかさと活気に満ちた年になってほしいものです。

どうぞこの機に県内外の皆様にご来館いただき、それぞれの楽しみ方を見つけていただければと思っております。心よりお待ちしております。

調査室のメンバーは8名。そのうち、展示資料の調査・収集を担当したのは、山下氏を含め、たったの3名。記念館建設への道は、少人数でのスタートでした。

準備室は小さな組織だから、県庁本館の建物(当時の鹿児島県庁は現在の鹿児島県民交流センターの場所に所在)ではなく、周りに色々な建物があつたり、食堂があつたり。開館の年が近づくにつれて、段々知事室の近くに部屋が移動していったんだよ。

最初に取り掛かったのは、「どんな記念館にするか」記念館の方向性を決定することだったといひます。

明治百年記念館って名前だったけど、中身をどうするか、テーマ展示をどうするかという話を延々としたよね。基本的には、通史というか、鹿児島島の歴史をどうやって紹介しようかという話で。いわゆる編年的なのが一般的だけど、これを逆から見るとかという話もあつたりしたなあ。

方向性が決まると、次に待っていたのは資料の調査・収集。博物館にとって、要の作業です。とはいえ、その業務を担うのはたったの3名。そこで、県内各地に資料調査収集協力員を置き、その地域に所在する資料の情報収集を行いました。また、県外で暮らす県出身者のもとを訪ね、資料収集協力を仰いだほか、テレビ、ラジオ、広告等を通じて一般県民にも収集協力が呼びかけられました。こうして、開館までの14年間に、約37,000点の資料が集められました。

県庁内に収蔵庫をつくったり、元々あつた部屋を潰して(収集した資料を)入れたり。地域振興局の1階に会議室があつて、そこにもいっぱい民俗資料を入れたりしていたよね。

集められた資料は、県庁内の特別収蔵庫をはじめ、鹿児島市内5か所に設置された収蔵庫内で保管されました。職員は交替で資料の状態を確認に行っていたといひます。

40周年記念事業のご案内

1 記念展開催

黎明館が蓄積した資料の中から、国宝や重要文化財、学芸員選りすぐりのお宝、コレクション資料を一挙公開します。

展覧会名：黎明館開館40周年記念展 黎明館の至宝

日程：令和6年2月2日(金)ー2月25日(日)

会場：黎明館2階 第2特別展示室



令和5年度の転出・転入者

転出者		転入者	
職名	氏名	職名	元所属・職名
館長	鎮寺 裕人	退職	
副館長(兼)総務課長	小村 浩信	退職	
総務課総務係 専門員	田尻 浩人	商工労働水産部商工政策課 経理課専門員	
学芸課学芸調査係 主査	小野 恭一	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター調査課 文化財専門員	
総務課総務係 主事	小倉 早紀	労働委員会事務局総務係 主査	

2 記念シンポジウム開催

これまで黎明館が県の歴史・文化に果たしてきた役割や、これから黎明館が進むべき方向性について意見交換を行います。
※詳細は、決まり次第黎明館広報媒体にて公開します。

3 記念誌発行

30周年以降の黎明館の歩みをまとめた記念誌を発行します。
※販売予定はありませんが、閲覧は可能です。

4 収蔵品目録のデジタル化

これまで黎明館が発行した収蔵品目録をデジタル化し、ホームページ上で公開します。

記念ロゴ、できました



鹿児島城跡から発掘された軒丸瓦の模様を組み合わせ、ロゴをデザインしました。

記念年パス、販売中

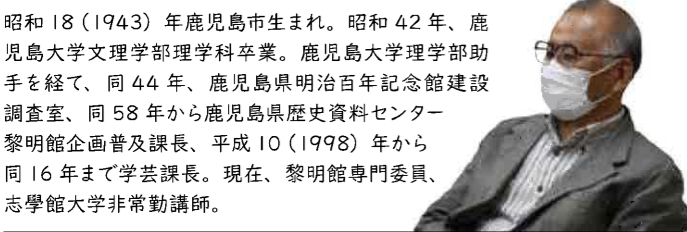


黎明館40年の歴史 INTERVIEW そのとき、黎明館は

昨年度のたより黎明では、黎明館40年の歴史を年表にまとめて振り返りましたが、今年度はこれまでに黎明館と関わった方々にインタビューを行い、そのとき黎明館では何が起きていたのか、実際にその場にいた方の声をお届けします。

第1回 黎明館オープンのとき

元黎明館学芸課長 山下 廣幸氏



明治維新から100年を迎えるにあたり、郷土の歴史や文化遺産を後世へ伝えるための事業の一環として、記念館の建設計画が持ち上がり、1969年4月に「明治百年記念館建設調査室」が設立されました。当時、山下氏は鹿児島大学の地学科で助手を務めていましたが、記念館建設準備メンバーに加わるようになりました。

最初は、自然史を入れた総合博物館を作るといひ話があつたらしい。地学なんてマイナーだったから、私の恩師だった大庭昇先生に、県から話があつたのだと思ふ。大庭先生から「おまえ行ってこい」って言われて。私も、昔からあんまり勉強は好きじゃなかつたから、「はい、はい」って言って赴任したことを覚えている。それから、何年(黎明館に)いたのかな。

(開館準備で一番大変だったことは)準備までの期間が長くかかつたっていうことだろうか。当初からすると、十何年遅れているんじゃないのかな。でも、逆に言うと、その時間があつて良かったのかもね。

1983年1月、記念館の名称が公募によって「黎明館」に決定し、その年の3月、建物が完成。新たに開館する博物館をアピールするため、5月には東京のデパートで展覧会を行うなど、開館へ向けた準備が着々と進められました。そして迎えた10月。建設計画がスタートしてからおよそ15年、ついに鹿児島県歴史資料センター黎明館が開館しました。

開館を迎えたときの心境は、まあ、ようやく…という感じだろうね。

長い年月をかけた建設計画でしたが、開館は、黎明館にとってスタート地点に過ぎません。山下氏は、開館後も美術工芸担当の職員として、様々な資料の収集や大規模リニューアルに携わりました。企画普及課長を経て、1998年から学芸課長に就任し、2004年に退職するまで、実に35年もの間、黎明館とともに歩んできた山下氏。インタビューの最後に、これからの黎明館がどうなっていくか尋ねました。

常設展示を見てくれという思いが第一、大事だと思うよね。1回来れば終わりだというのではなくて、1回見ればいいっていう意見に対して、博物館はいつも動いていて、新しい資料が出ているんですよっていうのを見てもらう。それから、もう一つあるのは、資料の収集。これはやっぱり、博物館の命だと思う。収蔵庫が足りないから収集できないっていうのは、あんまり言いたくないような感じがする。私なんか、わかりやすくいうと、何でもかんでも集めるってタイプだから。(収集していた)当時は、何になるだろうかって思っていたのが、20年、30年経てくると、その資料が生きてくる。そういったことを、博物館っていうのは狙わなきゃいけないんだらうと思うね。